

あの苦しみに耐えて、こうやって生き延びてきた者にとって、あれ以下の生活は無い。あの苦しい生活を耐えたのだから、今のこの苦しさを生き抜けるといふ自信があった。

私たち夫婦にとつての前半の人生は、波瀾万丈で不幸な時代に生きていた。今の太平洋な世は、何か恐ろしいような気もするが、あの悲しみや苦しみや悔しさを二度と再び体験することのないように、幸せな、平和な生活を大切にしていかねばならない。

生き地獄体験記

群馬県 大野 しづ江

奉仕隊の生活あれこれ

一面に凍りついた北満大陸の冬。地下四メートルぐらの井戸は、中までも深く凍りついてしまうので水がくみ上げられずに、その都度氷を割らなければならず、水くみは大仕事でした。

くむときは、井戸のそばで火をたいて、「つるはし」で井戸の周りの氷を砕くことから始まるのです。「氷のくす玉」のようになっている「水汲籠」を火に近づけて氷を溶かし、そしてその籠に入って井戸の中に入りて行くのですから、体重の軽い人の仕事となります。

井戸の中はとても寒くて、今で言う冷蔵庫に入ったような有様です。何分も入っていられないので、すぐに上がり次の人が交代して、また、井戸の中に入り氷を砕くのです。井戸の中に入っている以外の人は、命綱を押さえたり巻き上げたりする仕事をしていました。

だんだんと氷が割れてくるに従って籠が下がって行くので、命綱の操作も必死でしたから、ほんとうに大変な仕事でした。

春になると農場に入植しましたが、私たちと一緒にいた満馬も、連絡用に、農耕用に、いろいろと働かされて大変でした。前の方が見えないほどに広く長い畑を黙々として行き来する満馬は、私たちと同じように

頑張っていました。つらいとか苦しいとか、ひと言の弱音も吐くことをしない、それこそ「物言わぬ戦士」でした。

大陸性気候である満州の広野は、夏の日中はものすごいほどの暑さであり、反対に夜になると寒気が身にひしひしとこたえるほど気温が低下して、寒暑の差が大きく、慣れないと体がおかしくなってくるほどです。そして収穫の秋はまことに短くて、すぐに冬になります。寒さも急激に加わってくるのです。

そのころになると、もう越冬のための準備が最大の仕事で、日夜おおわらわになります。ひと冬の暖房用の燃料となる薪を山にとりに行くのですが、風が強く横なぐりで吹きつける雪の中を、ソリに薪を山積みにして日が暮れるころに帰るのですが、人も馬も体中に雪が積もり、それが凍りついて体のあっちこっちに水柱がぶら下がっていました。馬の下腹に下がった水柱が、馬の歩みに応じてぶつかり合い、いろいろな音を出していたことが印象的で、今でもその音が耳にこびりついています。

昨日まで元気にソリを引いて私たちと一緒に山に仕事に行っていた馬が、今朝になって急に元気がなくなり動かなくなったので、別の馬を引いて出掛けましたが、夕方、帰ってみると嘶も弱くなっていました。私たちではどうすることもできずに、ただ、そばに付いているだけでした。

翌日の朝には、体がこちこちに硬くなって死んでしまいました。馬は死ぬまで働くとは聞いていましたが、かわいそうなことでした。哀れな姿をみて涙がとまりませんでした。

農場から七〇〇メートルばかり離れたところに、野菜の貯蔵庫がありました。防寒服、防寒靴、防寒帽にマスクという完全武装に身を固めて、ソリを引っ張って男女二人で、貯蔵してある野菜をとりに行くのです。貯蔵庫の中には男性が入って、三階ぐらいの深さのところをネズミのようにはって下りて行くのです。持っている籠に野菜を入れると声を掛けてきます。すると滑車で吊り上げるのですが、滑車を動かすには女性一人の力では、重たくてきつくて大変な仕事でし

た。野菜の取り出しを何回か繰り返して、十日分の消費量をソリに積んで戻るので。夕焼け空を背にしながら、ソリを引くのです。顔にも雪が吹きつけて白いお面をかぶったようになり、吐く息でまつげも真っ白になってしまいます。その雪化粧をした白い顔が、今でも臉に鮮やかに浮かんできます。

農場での宿舎は、普通三人部屋のところにも五人も住んでいたの、寝るのも窮屈な思いをしていました。文化も行き届かない北満の果てしない地で、原始的な生活をしていても、ただただじっと我慢して生活をしていました。我慢できたのは、ただ「戦争に勝つため」という一つの大きな目標があったからで、どんなに不自由で苦しい生活でも、だれ一人として不平不満を言う人はいませんでした。そして、よく働き続けました。

「戦争に勝つためには！」という大きな目標の下には、どんなに厳しく命がけの生活でも、耐えるのが戦時下の異郷での生活でした。

敗戦とソ連兵

昭和二十（一九四五）年四月、まだ、桜草の芽も出ない残雪のある枯野に、冷たい風が肌を刺すように吹いているころのことです。

懐かしい思い出のある報国農場を退場して、場長さんに連れられて北安省の弁事処の開拓課に行きました。場長さんの口利きで、開拓課に勤めることになったのです。

お姉さんのように親しくしていた島崎さんが、「大陸の花嫁」となってこの開拓課を辞めて行かれたので、私は一人ぼっちになり、取り残されたように寂しい毎日を送っていました。一日も早くこの寂しさから抜け出したいものと、私も気持ちを持ち直して働きました。そんなときに私にも、次々と結婚話が持ち上がりました。

私は健康には自信がありましたし、それに物事に対してあまりくよくよしない性格でもありましたので、満州花嫁向きだったのでしょう。開拓団の方からは非、花嫁に欲しいというお話でしたが、まだ、その気

になれず、もう少し開拓課で働きたいと言ってお断りしていました。

開拓課での主な仕事は、開拓団、義勇隊の人口調べでした。北安省庁の職員は、日本人が三分の一ぐらいであとは全部満人でした。私は、開拓課長のお宅で家族同様にお世話になっていました。

仕事にもそろそろ慣れてきた六月の終わりごろに、突然に前にお世話になっていた奉仕隊の場長さんが、満拓公社に用事があって北安に出張してこられました。そして私を訪ねてくださいました。

そのときの話によると、奉仕隊農場の萩原先生や桐生さんなど農場の男性の大部分の方が召集されて兵隊に行き、農場も随分と寂しくなり、また、大変になってきたとのこと、「今度、皆さんのところに面会に行きませんか」という話をして帰られました。

このように、満州各地にある開拓団の男性は次々に召集されて、残っているのは老人や女・子供だけになっていました。「これで開拓団は大丈夫なのだろうか」と思うことがしばしばありました。帰っていく場

長さんの後ろ姿を見て、何となく不安を感じたものでした。

その後、私は面会に行く準備を始めました。皆さんに食べてもらおうと赤飯や饅頭の材料を集めたり、その他の日用品などをリュックサックに入れて場長さんの来るのを待っていました。しかし八月に入っても場長さんは見えませんでした。

そのうちに朝礼で、「ソ連といよいよ戦争になる」という話がありました。北安省庁でも、男性には銃が渡され、女性も日の丸の鉢巻きをしめて木銃を持ち、必死の訓練を始めました。

八月十五日、敗戦の知らせと同時に、ソ連軍の戦車が国境を越えて侵入してきました。同時に空からは、ソ連機による爆撃が始まりました。満拓の社宅にも爆弾が落ちて、あちらこちらから火の手が上がり、たちまちのうちに燃え出しました。

官舎の皆さんも、荷物を持って火の中をあっちへこっちへと逃げ回っている様子が煙の中から見えました。私たち県庁の人々も避難の準備を開始しました。

そのうちにソ連兵が侵入してきて、ガスも水道も出なくなりました。

若い女性はソ連兵に狙われるというので、私たちはみんな顔に鍋ずみを塗り黒くしました。髪も切つて男女の見分けがつかないようにし、服装も男物に着替えて汚れた手ぬぐいで頬被りをして、なるだけ外にも出ないようにして家の中に閉じこもっていました。それでも水道が止められて水が出ないので、致し方なくソ連兵の監視の目をくぐり、見付からないようにして水くみに外に出ました。出るときには素早い行動ができましたが、水をくんで家に戻るときにはそうはゆかず、水桶が重くて走ることもできず、もたもたしてしまいました。そのうちにソ連兵に見付けられて後をつけられ始めました。

家に入るときには、十分に注意をしていたのですが見付かつてしまい、大慌てで家に飛び込み、内から銃をかけたのですが、表から二発、「バーン、バーン」と撃たれ、そのうちに銃を壊しにかかりました。致し方なく恐る恐る戸を開けましたが、そのとたんにソ連

兵の赤い恐ろしい顔が目に見えび込んできました。

ソ連兵は、私をにらみつけながら銃口を向けて、土足で座敷に上がり込みました。私は急いで風呂場に隠れました。課長の奥さんは便所に隠れたそうです。子供たちが右往左往していたので、すぐに部屋の中に踏み込まれ、風呂場まできて私も見付かってしまいました。「今はこれまで」と覚悟を決めました。恐ろしくて体がぶるぶると震えていました。ソ連兵の太い大きな手で、腕をつかまえられてつまみ出されてしまいました。胸に銃口を突きつけられたので、私は両手を上にあげました。これからどうされるのかと思い、生きた心地がしませんでした。

そのうちに体を触られて、時計、万年筆そして財布と、目ぼしい物を次々に手当たり次第に奪われられました。さらにまだ何かないかと手荒に体を触られましたが、何もないことが分かると、天井に向けて銃を一発撃ち込み荒々しく出て行きました。ほっとして気が緩み、へたへたとその場に座り込んでしまいました。

翌日、表の戸をどんとたたたくので、つい銃を開

けてしまいました。するとソ連兵とぐるになつて満人の警察官を先頭にして五、六人が、土足のまま家の中へ入ってきました。課長さんをはじめ家族や私は手を上げて小さくなり、部屋の隅にかたまっています。ソ連兵は家の中をかき回して、何か珍しい物とか良い品物があると持ってきた袋に入れていました。そのうちに畳まではがして床下も見っていました。日本に帰るときのためにと用意してあったリュックサックも見付かり、奪われてしまいました。

一人一人を銃口で小突き顔を上げさせて、男か女かを確かめていましたが、そのうちに何かぶつぶつ言いながら出て行きました。すぐに銃をかけてはっとしました。

だれともなく、「怖かったね。ソ連兵は何と言って出て行ったのかね」と言つて、また来るかもしれないから銃はかけないことにしようと言つて話しました。

それからは、毎日毎日あちらこちらでソ連兵に暴行を受けたり、略奪をされたりした話ばかりが聞かれました。日本の女性がソ連兵に連れ去られたということ

もありました。通りには人一人、犬の子一匹も見られなくなり、薄気味悪いゴーストタウンとなりました。緊張をしているせいか、何もしていないのに体が硬くなり、節々が痛くなりました。

県庁の総務課長付だった美人の職員が、ソ連兵に暴行、凌辱されて、井戸に身を投げて自殺をした、痛ましくも悲しい事件もありました。「井戸を汚して申し訳ございません」と、井戸のふたに書いて飛び込んだのです。いつ私自身の身にもこのようなことが降り掛かってくるかもしれないという、恐怖の毎日を過ごしていました。

私は二度も銃を開けたので、課長さんから、「大野君は体格がよいから目立ちやすいね、よく注意しなさい」と、嫌味を言われたこともありました。

敗戦になつてからは、安心して食事もうろくできない有様でした。ソ連兵と満人がぐるになつて、まだ明るいうちに、夜に押し入る家に目印を付けているのです。

ある日突然に、「女性は独身寮に行くように」とい

う話がありましたので、私と奥さんの二人は夜になるのを待って、真っ暗い中をはうようにしながら独身寮に行きました。開拓課の柴田さんが、自分の部屋に私たちを入れてくれました。ほっとして手、足を伸ばして休むことができました。

夜になっても電灯もつかないので、早く横になりました。しかし、何となく心配で寝付かれず、うとうとしていると、多分夜中の十二時過ぎだったと思います。が、暗やみの中で突然に、「きゃあー。きゃあー」という女の人の悲鳴が聞こえてきました。しばらくすると今度は、「いやー！ 助けて！」と、連呼して助けを求める声が出て、それがだんだんと遠のいていききました。

ソ連兵に連れていかれたのです。満人のスパイがいて、その夜に寮に女性が集まるという情報をソ連兵に流したようです。

私は奥さんと話して、すぐにここを出ることにしました。また真っ暗い中を、しっかりと手をつないで、こけつ転びつしながらはって行き、やっと家に戻るこ

とができました。

北安より脱出

こんな悲劇がいろいろと起きているうちに、北安は治安が悪いから、ここを抜け出して南下するようにとの命令が届きました。みんなは日本に帰れるものと思いい込んでしまいました。米袋などでリュックサックを作り、食糧は持てるだけたくさん持って行くこととして準備をしました。鍋釜などの炊事用具や毛布などの寝具は、課長さんの子供四人にも持たせることにしました。

課長さんと私は、リュックサックの上にも毛布二枚を乗せるなど、背負えるだけ背負ったので重くなり、足を一步一步踏み出しながら歩くのがやっとでした。子供の手を、各人がしっかりと握りしめて歩きました。その姿勢は惨憺の極みでした。

北安中心街の広場には、千人近い日本人避難民が集合していました。北安駅までの沿道には、ソ連兵が銃を構えて見張りをしており、所々には戦車が止めてあり、その上にたばこの煙で輪を作りながら楽しんでい

るソ連兵がいました。

戦争での「勝ち負け」の差がはっきりと表されている光景に、悔しさと悲しさで、ただでさえ重い足並みがさらに一層重くなりました。

真夏の焼けつきそうな暑い日でした。オーバーを裏返しに着て歩く姿は「こじき」よりも惨めな姿でした。

北安駅も日本人避難民でいっぱいになっており、私たちは駅近くの学校に連れていかれ、そこで出発するまで集団避難生活をするようになりました。

学校の収容所には何日も前から収容されている人たちがいて、空き缶で煮炊きをしていました。重症の老人も横になっていましたが、医者も薬もないようので気の毒な思いでした。

国策の協力者として全財産を投げ出して、満州開拓のために極寒の北満に移住して、営農よりは国境防衛の方に力を向けられて働いた結果は、棄民となって置き去りにされて、やっとの思いでここまでたどり着いた所がこの有様と思うと、慰める言葉もなく、今日ま

での人生が何だったのかと思うだけでした。

下駄箱の片隅を片付けて、やっとな腰を下ろすことができました。足を伸ばすこともできないほど狭い場所での集団生活が始まりました。ここでの生活は、一時的であるということでお慢をしての生活でした。

六日目に移動の指示があり、忙しく出発準備をして北安駅に行き、今度は列車に乗ることができましたが、ぎゅうぎゅうに詰め込まれて、動くこともままならぬ状態でした。車内の空気は、汚れ放題で形容し難い悪臭を発散して苦しいことでした。

夕方近くになると、駅でもない野っ原の真ん中で列車は止まってしまいました。急な停車なので、みんなは不安な気持ちになって荷物の陰に隠れる人もいました。外が暗くなり何も見えなくなるころに、ソ連兵と満人による車内での略奪、暴行が始まりました。

車内に入ってきて、一人ずつ身体検査を始めました。ソ連兵の指図で、満人がめぼしい物を見付けては取り上げました。そのうち取る物が無くなると、今度は「女を出せ」と言い出して、連れて行かれた人も

幾人もいました。最初は大声で助けを呼んでいましたが、だれも助ける人はなく、そのうちに声も出ずに失神状態となってしまうようです。男性がいても、銃を持っているソ連兵にはどうすることもできず、みすみす目の前で引っ張られて行く女性を助けられず、切歯扼腕するばかりでした。「銃があつたならばなあ」と、悔し涙を流すだけでした。

子供は声も枯れるほどに泣き続けていました。私は見付からないように、病人の如くに苦しい表情をしながら床にうつ伏していますと、ソ連兵がきて襟をつかんで起こし、私の顔を見ていました。暗いので呻き声を出しながら、おなかを押さえて苦しんでいると、ほいと襟を離してそのまま行ってしまいました。私は、脇の下から冷や汗がじっとり出ていているのがよく分かりました。

夜明け近くなつて、やっと列車は動き出しました。みんなの顔は、ほっとした安堵の気色になりました。ひと晩で多くの財産を略奪され、多数の女性の犠牲者を出してしまいました。

列車は速度をあげて走っていますが、車内は相変わらず悪臭が充満している上に、むせ返るような暑さで、オーバーの下から汗が出て足元まで流れていました。窓の所に時々水がたれてくるので何かしらと不思議に思っていました。が、ひょいと窓から上を見たら、満人が列車の屋根に乗っていて、そこで小便をしているのです。それが窓を伝わって流れているのです。飲まなくてよかつたと、ほっとしたものでした。

列車は、どこをどの方向に走っているのかも分からず、ただただ運を天に任せているのみの避難行でした。

人いきれと悪臭とすし詰めの中之の赤ん坊の泣き声は、一層暑さを感じさせて、いらいらした気持ちを高ぶらせました。課長さんのところの生後三カ月の赤ん坊も、おなかをすかして泣くのですが、奥さんはまだ産後の体の回復が順調でなく体力も戻っていないので、お乳が十分に出ない状態でした。

課長さんは、「ほう、ほう」と言いながら、指に砂糖を少しつけてはなめさせていました。太い指につい

ている少しばかりの砂糖を必死になってなめている姿と、泣きそうになっている課長さんの顔を見ていると、どうしてあげることもできないこの状況に自然と涙がこぼれてきました。車内は、みんな半病人のようになっています。

列車の窓のすき間から、時々外をのぞいて見える景色は、ハルビン近くを思わせました。あの雄大な大河の流れが見えたのです。夕焼け空を川面に映し出して緩やかに流れているさまは美しく、戦争の悲劇をも忘れさせる一瞬でした。そんな美しさも瞬時のことで、よく見ると、人や家畜の死体があちこちに浮いていました。

列車は夜になって、ハルビン駅にやっと到着しました。すぐにホームに降ろされましたが、屋根も無く吹きさらしのところで、子供たちをしつかりと抱えて、ソ連兵に監視されながら千人ぐらいの一団が、地面にうずくまって一夜を明かしました。朝になり、また列車に乗せられて新京に向かうことになりました。車中は相変わらずの有り様でした。

新京での難民生活

新京に到着し、一人一人厳重な検査を受けましたが、子供がたくさんいたので、私も母親のふりをして子供を抱えて検査を受けましたので助かりました。ソ連兵は、母親には何の手出しもしないと聞いていたので、その後も子供を借りて助かったことが幾度かありました。

新京は、北安やハルビンよりもソ連兵が少なく、平和なように感じました。

新京駅から少し離れたところの学校の収容所に入られて、何回目かの集団生活が始まりました。

数日たつと、周囲の様子もだんだんと分かってきました。先住の避難民が食べ物やたばこを売りに、一日に何人も来るようになり、その人たちからいろいろと苦労話を聞きました。お互いの情報も入り、この収容所から知人を頼って市内に行く人も出てきました。

課長さんもその一人でした。ある日、以前新京に勤務していたときの友人であった中島さんを訪ねていたところ、中島さんの家族は疎開していて、ただ一

人、長男さんが残っていて、部屋も空いているので引越して来るようにとの話で、お世話になることになりました。新都市街の中期にあり立派な家なので、安心して課長さん一家と私はそこに移りました。

九月になると退職金として頂いたお金も残りが少なくなり、心細くなってきましたので働くことになりました。

最初はたばこ売りでした。前の収容所にいたときにたばこを売りにきた人に、たばこの作り方や売り方を教わっていましたので、迷うことなく始めたのですが、しかし、そう簡単ではありませんでした。仕入れで満人にだまされて、手巻きたばこを機械巻きたばこと言われて、高く仕入れてしまいましたので、なかなか売れませんでした。一度や二度では見分けがつかみせん。街角に立って一生懸命に通る人に声を掛けるのですが、見向きもしてくれません。年配の満人が近づいてきて、自分のたばこを出してみせて、「あなたのは手巻きたね」と教えてくれました。

毎日毎日、奥さんとたばこ売りをしていましたが、

一日中売り歩いても昼食代ぐらいにしかな利益がなく困ってしまいました。

満人の食堂で働いている避難民の中には、美しい着物を着て男性の相手をしている人もいましたが、私にはできないことでした。

新京のポプラの葉も黄色く色づき、葉を落とす始めて冬が近づいてきました。以前、副県長だった方が捕らえられたので、課長さんは一歩も外に出ることはせずに、毎日赤ん坊の世話をして家の中で過ごしていました。

奥さんと私は、朝から夕暮れまでたばこ売りで、立ち通しの毎日でしたが、私の売り上げが少ないので身の縮む思いでした。奥さんは満語ができるので、満人にも売ることができました。二人で売っても大した利益もなく、朝はおかゆをすすり、夕方帰るときに夕食の品物を買うのですが、満人の店で、ほっかほっかと湯気を立てているおいしそうな饅頭を見ると、おなかの虫が鳴くのがよく分かりました。一度でよいから腹いっぱい食べてみたいと思う毎日でした。

そのうちに、八路軍の兵士の好む品物は何かを考へるために兵士の行動を見ていると、よく卵を食べていましたので、ゆで卵をたばこの横に置いてみますとよく売れるようになりました。八路軍の兵舎が近くにあったことも売れた原因でした。時々兵舎まで持って行って売りましたが、よく買ってくれました。あるとき八路軍の兵士がきて、「隊長が卵を買いたいと言っているから持って来るように」とのことです。十個持って行きますと、私を奥の方に連れて行くので、こわごわ後について行きましたら三人の兵士に囲まれてしまいました。様子が変なので、卵を放り出して馬小屋の中に夢中で逃げ込み、それからどこをどう走ったかも分からずに命からがら家に戻りました。顔は真っ青で体はがたがた震えていたので、奥さんに「どうしたの」と何度も聞かれましたが、口がきけずに答えられませんでした。

十一月も末になると寒さが厳しくなってきました。赤ん坊の中也ちゃんが病気になるてしまいました。医者にも診せられず、やせ細って泣く力も無く一晩で死ん

でしまいました。おかゆを煮た土鍋とかわいい茶碗と一緒に入れて、日本人埋葬場所である競馬場に埋めに行きました。四キロメートル四方もあった広い場所も、次から次と死亡者が運ばれてきて半分ぐらいはふさがってしまいました。

甲いの終わった数日後の夕方、ソ連軍の将校がきて何やら大声でどなっているので、課長さんが紙と鉛筆を渡すと、口笛を吹きながら、布団に二人の寝ている姿を二組書き、時計を見せて八時に来ると言って出て行きました。八時になると、将校二人と着物を着て化粧をした日本人女性二人が入ってきました。私たちは寝ることもできずにいましたが、夜半の一時になると、女性は何と言いましたか。話を聞くとその人たちは大変な仕事であるようでした。課長さんは、「家には女と子供がたくさんいるので帰られては困る。あなたたちはお金をもらっているのではないですか」と強く言ったので、朝までいることとなりました。零下何十度という寒さになっても石炭を買うお金もなく、燃やせる物はすべて燃やしつくしてしまいまし

た。開拓団の人から、満鉄の駅に石炭を盗みに行き、それを売って生活をしていたと聞き、私も家用ぐらいは盗ってきたいと思い、四キロメートルぐらい離れている駅まで行きました。

いろいろな人たちの乗り降りです。駅はごった返していましたが、なんなく石炭集積所に入り込みました。リュックサックに石炭を入れて集積所から出たところで捕まってしまう、銃をつきつけられて引きずられながら監視所に連行されてしまいました。私は、一番の上役と見られる監視人の足元に必死にすがりつき、「両親や子供がたくさん待っているので勘弁してください」と、泣きながら訴えました。そのときは、折角集めた石炭は取り上げられてしまいました。許してもらい、やっとの思いで帰ると、課長さんが風邪をひいて熱を出して寝ていました。石炭があったら部屋を暖かくしてあげられたのと思うと、取り上げられた石炭を残念に思うばかりでした。課長さんのためにも、もう一度行く決心をしました。

開拓団の人たちが上手に盗ってくるので、要領を聞

きました。

今度は、子供の「ねんねこ」の中に石炭を入れて帽子をかぶせて背負うようにしました。子供を背負っていると思ったらしく、とがめられることもなく無事に帰ってきました。この石炭で部屋をしばらく暖かくすることができました。

三度目は奥さんと二人で行きましたが、少し拾っているときに、突然監視人から撃たれ、背中を丸めて必死になって逃げ、駅の近くの満人の八百屋に入り隠れました。その日は石炭拾いの人が多くて監視人に見付かったようでした。

八百屋に隠れていたら、その主人が出てきて奥さんを見てびっくりし、「アイヤー、奥さん」と、懐かしそうに声を掛けてきました。昔、ボーイとして課長さんのところで使われていた、長さんという満人でした。

私たちの生活事情を聞いて、早速に食糧と石炭をマーチョに積んで、家まで送り届けてくれました。その後、長さんからはこを安く仕入れて、今までの

ように一日中売り歩くこともせず、人通りの多い街角に立って売ればよくて、商売が楽しくなりました。私の隣で商売をしていた満人が毎日たばこを買ってくれました。その人も親切な人で、足が冷たくなり足踏みをしていると、空缶に豆炭を入れたものを私の方に寄せてくれたりしました。ある日の夕方、私が帰りかけているとお金をたくさん見せて、「私のお嫁さんになつてほしい」と引き止めましたので、「私にはたくさんの子供がいる」と、手まねで話して帰りました。それからはその場所には行きませんでした。

長さんが、時々、不自由をしている物を運んでくれましたので大変に助かりました。

課長さんが変な咳をしますので、心配になり医者に診察をしてもらったところ、肺炎と診断されてびっくりし、奥さんが付ききりで看病することになりました。私は、日中だけでも、二人の子供を連れてたばこ売りに出ました。

それから数日後、急に八路軍の兵士が多く見受けられるようになりました。二日目のこと、八路軍の隊列

を見ていましたら、急に「正也！ 正也！」と呼び掛ける兵士がいましたので、驚いてその人を見たら課長さんの長男の君也さんでした。君也さんは、家族と別れて中学校の寄宿舎に入っていました。敗戦になり、十四歳の少年でしたが八路軍に入隊していたのです。すぐに中島さんが、長さんを連れて八路軍の本部に行き、君也さんの休暇を頼んで許可をとり、君也さんを連れて家に戻りました。

一番に気掛かりであった君也さんが無事に帰ってきたので、家中で大喜びでした。八路軍に入ってから、給養があまりよくなかったのか、目ばかりぎょろぎょろしていて、体はやせて顔色も青ざめています。

突然に、八路軍と中央軍とが新京市街で戦争を始めました。一般市民は逃げ回り、家の中にも銃弾が窓から飛び込んでくる有様で、待避する場所を探すのが大変でした。砲弾の炸裂する音が地響きとなって伝わってきます。外には一歩も出られません。日本人もマスクをして八路軍の兵士と一緒に戦っています。

した。そのうちに、いつの間にか八路軍もソ連兵も見掛けなくなり、代わりに中央軍とアメリカ兵が市街に入ってきました。

満人は商売上手ですので、すぐにアメリカ兵に向く物を売り始めました。新京市街は、次第に平和な暮らし向きになってきました。君也さんも八路軍から家に戻り、みんなもほっとしました。

私たちは長さんに頼んで、満人が売り買いをしている場所に行き、派手な着物を安く買い、それでアメリカ兵向きのスリッパなどを作って売りましたら、これがよく売れました。元手が安いので随分助かりました。

課長さんの容体が思わしくなく、医者に「胸の病気」と言われて、子供たちは別の部屋に移され、奥さんだけが出入りをする事となりました。暖かくなれば回復するだろうと期待していましたが、寒さが峠を越す日のみを祈りながら、子供たちを連れてたばこ売りに精を出していました。

ポプラの木の芽が膨らむころに、課長さんの容体が

急に悪くなり、掛けている布団が持ち上がるくらい「けいれん」を起こし、うなされていました。中島さんは仕事に行かずに、長さんと共に課長さんの枕元に座っていました。課長さんは大きな目を見開いて、周囲の人の顔をじっと見つめて、何かを言いたそうに手を出していましたが、何かは分かりませんでした。子供たちに向かっても何度も口を動かしていましたが、そのうちに息を引きとりました。奥さんも私も、あまりの悲しさに全身の力が抜けて涙も出ませんでした。課長さんの歯には金歯がたくさん入っていました。中島さんと長さんとで、金歯を抜きお金に替えて、いろいろな支払いに使いました。

長さんも、課長さんが亡くなってからは顔を見せなくなりました。六月ごろに、君也さんが急に熱を出して医者に診てもらいましたら、赤痢にかかっています。マーチョに乗せて入院しましたが、病院内は重病人でいっぱいでした。熱にうなされて、「お母さん、お母さん」と呼び続けていましたが、四日たっても良くならずに、父の後を追うようにして死んでしまいました。

した。遺体を別室に置いたままで、私たちはお金の心配をしていました。課長さんの物を全部売りましたが余りお金にならず、奥さんが大切にしていた金の指輪とべっ甲のくしを売ることになりました。中島さんは、「母のものですが」と言って着物を出してくれました。それを市場で売って、やっと病院への支払いができました。

病院の裏では、開拓団の人が遺体を焼いていましたので、君也さんも茶毘ぢびに付してもらいましたが、人間扱いではありませんでした。骨箱を抱いての帰り道ではだれも一言も話さず、ただ涙のみが流れていました。

八月に入って、中島さんが日本に帰れるという話を聞いてきました。

奥さんと私は、商売の帰りに中也ちゃんのお墓の土を取りに行きましたが、どこにあるのか分からなくなるくらいにお墓が増えていました。一緒に埋めた鍋が見付かったのでやっと分かり、土を袋に入れてお参りをして帰ってきました。四キロメートル四方もあった

広い墓地も、大部分が埋められておりました。帰国の話が出てきたので、墓を掘り返している人、遺体を焼いている人もいました。

奥さんは、「君也も後ももう少し生きていたら日本に帰れたのにね」と、何度も何度も言いますので、涙が流れてきました。

久しく顔を見せなかった長さんも、だれに聞いたのか、帰国出発の二日前に、食糧や焼肉をたくさん持ってきてくれました。中島さんは、自分は帰れないからと言って、九州の実家に手紙を書き、奥さんに頼んでいました。

新京での一年間の避難生活で、課長さん、君也さん、そして中也ちゃんと、家族が三人も死んでしまいました。

やっと、夢にまで願った引揚げの順番がきて、八月十九日に新京をたちました。

アメリカ兵の監視のもとに、コロ島の収容所に到着し、ここで乗船の順番を待つために数日滞在しました。やっとのことで私たちの順番がきて、一列に並び

荷物と身体の両方の検査があり、白い粉を頭から、背中から、足のつま先までかけられて、やっと乗船することが許されました。

日本への引揚げ

引揚船は、もとは石炭運搬船だったそうですが、これに乗れば日本に帰れるという喜びで、薄暗い船室に座っても何も感じませんでした。

甲板で日本の船員さんが、「今、日本で流行している歌です」と言って、上手に歌ってくれました。また、手品や飛び入りの「のど自慢」などがあり、楽しい航海でした。船室はむせ返るようでしたので、私は甲板に出て涼んでいました。美しい夜空を眺めていると、遠い故郷や両親家族、友人知人の顔が次から次と浮かんできました。

船は無事に博多港に着き、下船しました。日本の土を無事に踏むことができました。博多では、工場のよくな大きな建物の中に入れて、全員一列に並び、順番に耳から血液を採取し検査され、それが済むと引揚者としての証明書を受け取り、帰郷予定先に連絡す

ることを許されました。

どこを見ても、「尋ね人」のはり紙でいっぱいでした。翌日、課長さんの兄さんと、その使用人の人が迎えに来られました。奥さんの話を聞き、骨箱を抱きしめて泣き出しました。生きて帰って喜ぶ人、骨になって帰ってきた人、それを悲しむ人、それぞれの気持ちは別ですが、異国で敗戦を迎え逆境になっても負けること無く精いっぱい生きてきた私にとっても、お骨になって帰国した人々の肉親の涙を見ては、申し訳ない気持ちでいっぱいになり、涙が止まりませんでした。

九州でしばらく体を休めて帰郷するように言われましたが、その晩の夜行列車で帰りたいと話したら、紺の上下の服とお金をいただきました。

私は荷物がありませんから身軽で汽車に乗り、ただただ一刻も早く家に帰り着きたい一心でした。東京駅から上野駅に行き、下仁田に着いたのが九月十一日の午後三時ごろでした。

ちょうど、母が子供を背負って畑から帰ってきたと

ころでした。私は、「母ちゃん。帰ってきたよ!」と、一言だけ言って後は涙が出てくるだけで、大声を上げて泣き伏してしまいました。母も、「苦勞したなあ!」と、いつて土間にひざまずき、一緒に声を出して泣きました。そして、ときれときれに、「女の人で満州に行った人は、一人残らずソ連兵に連れて行かれた、という話を聞いて随分と心配していた」と繰り返し繰り返し言うので、親の有り難みをしみじみと感じて、また、涙が出てきました。母は話し続けました。兄が二人共戦死して、この間葬式を出したばかりということも話しました。全身から力が抜けて母にしがみつき、また涙がとめどなく流れました。

帰郷してしばらくたち、気持ちも落ち着いてきたころから、奥さんとの文通を始めました。子供たちも元気で学校に通っていることで安心しました。奥さんも働いているとのことでした。

あの避難行の中で、中島さんや長さんの援助がなければ、今ごろはどんなになっているだろうかと思像するだけでも、背筋にぞーっと冷たいものが走ります。

このお二人には、感謝しても感謝しきれないものがあります。

敗戦後の苦しみを思えば、どんなことにもぶつかっても生き抜くことができる、時々、自分自身に言い聞かせています。

過ぎ去った今、長かった、そして苦しかった若き日の満州での生活を振り返ってみるとき、あのこともこのことも、みんな懐かしい映像となってよみがえってくるのみです。

引揚げ苦勞の記

群馬県 富澤 マサ

一 渡満前後の思い出

大正五(一九一六)年十月、私は群馬県群馬郡群馬町の農家に生まれました。母親は、四十歳ぐらいのころに、身重の体で正月行事の「たこあげ」を見物に行き、冷えが原因で亡くなりました。姉十二歳、私は七